

有機農業推進へ土づくり講演会

まず緑肥で生育確認を

土づくり推進フォーラムは今月、有機農業推進のための土づくりの現状と将来展望をテーマに講演会を開い

た。広島県東広島市で米や野菜の有機栽培に取り組み、広島土壤医の会の会長を務める森昭暢さんは、有機栽培

を始める際にまず緑肥を栽培し、その生育が良かった圃場(ほじょう)から作物を植える方法を紹介した。

森さんは、緑肥や作物を栽培するときは必ず土壌診断をし、必要であれば、食品副産物やぼかし肥料の他、菜種油かすなどの窒素をメインにした有機質肥料を施用。輪作や混作で緑肥を育てること

で、土づくりをしているとした。「いきなり作物でやると失敗する。緑肥で試して土壌が安定してきたら作物を育てると、ある程度計画通りに生産できる」という。

森さんは有機栽培での土壌診断の重要性についても強調。土や投入する資材の性質を知ること、有機栽培でも安定した生産ができることした。「有機質肥料を使った土づくりは難しい。土壌診断をして3、4年かけて土壌のバランスを整えていく」と話した。

その他、秋まき小麦の有機栽培について試験する北海道立総合研究機構の小谷野茂和氏は、面積を広げるためには「省力的かつ広い面積でできる畑作での有機輪作体系を確立していく必要がある」と指摘。島根大学の金子信博客員教授は、不耕起での土づくりの有用性を説明。秋田県東京事務所の加藤はなる氏は、有機栽培の産地化について講演した。

(後藤真唯子)